

夏目漱石文学の研究  
——鏡の表象と「うつし」の文学

解 璞

## 序 章——鏡の表象と「うつし」の文学

本論文の目的は、大きく分けて二点ある。一点目は、漱石文学における鏡の表象がいかに描かれ、いかに時代とともに変容した世界をうつししているかを究明することである。二点目は、漱石文学の表現方法が中国でいかにうつさされているかを検討することである。

従来、夏目漱石文学における鏡の重要性と特異性について、しばしば指摘されてきた。しかし、異なる文体で書かれ、そして東西文化に基づいて書かれた漱石文学を、作品ごとに具体的に分析し、包括的に考察することはほとんどない。そこで本論文では、漱石の文学論やエッセイ、同時代の評論および雑誌・新聞の言説を参照しつつ、第一部「うつす文学」と第二部「うつされる文学」という二部構成で、漱石文学における鏡の表象とその機能について考察した。それによって、漱石文学を新たに見直す視点を提示してみたい。

本論文の考察対象となる鏡は、主に比喩的意味で使用されたものだ。漱石の言葉でいえば、「非我」（世界）を映す「我」の「意識」と、身心の気分を映す「想像」の鏡、さらに移動による映し方の変容およびその表現方法のことである。「意識」の鏡は、物事を鮮明に映す近代的な感性を表すものだとするれば、「想像」の鏡は、前近代的な象徴的神秘性を持つものだと言える。そして、両者の映し方は、移動の時代とも呼ばれる近代において、移動や越境とともに、必然的に変化するのである。

また、時代を超えて存在する「うつす」こと自体の不思議さ、そして「うつし」という言葉の多義性から見ると、鏡には、「映し」の意味に限らず、「顕し」という神や霊に関する意味もあれば、越境して移動するという近代の特徴をよく表す「移し」の意味もある。たとえば『倫敦消息』などの作品にあるように、境界を超えて移動する時に、必ず自己像の揺れが伴っている。そのため、移すことと、他者や異国の視線に映された自己像の問題、つまり「移し」と「映し」の問題が密接に関わっているのだ。しかも『文学論』の序にもあるように、自己と他者、自国文学と外国文学との緊張関係による自己像の不安定さこそ、漱石文学の端緒があることを忘れてはならない。

さらに、この「移し」の問題は、漱石文学が翻訳や受容などの形で別の言語に移された時にも生じる。異なる言語に移され、異国の読者の目に映された漱石文学と漱石像も、当然、変貌するのだ。特に別の言語でほぼ同じ情緒を表す作品として再構成するという翻訳の問題は見逃してはならない。そこで本論文の第二部では、漱石文学が中国で初めて紹介された時期に注目し、最初の翻訳者である魯迅の訳文と創作にうつされた漱石像を検討することにした。

本論文の全体を通して、夏目漱石の文学を鏡の表象と「うつし」の観点から分析し、その意味と機能を明らかにしていく。また、魯迅文学との比較によって、漱石文学の表現方法のみならず、それが中国でいかに映されたかも明らかにするであろう。

以下では、本論文の概要を示すことにしたい。

## 第一部 うつす文学

第一部では、夏目漱石の作品における鏡の表象が、具体的にどのようなように描かれ、どのような意味を持っているのかを分析していく。そのような分析を通して、作品における鏡の機能のみならず、同じ作品の中に出会う前近代と近代、東洋古典と西欧文学の接点も明らかにしていきたい。

### 第一章 最初期の夏目漱石文学における「顔」と「鏡」

#### ——『木屑録』と『倫敦消息』論

第一章では、夏目漱石の出発点をマークする二つの作品、漢詩文などの伝統的な文体で書かれた『木屑録』と、近代性を標榜する言文一致体で書かれた『倫敦消息』における顔と鏡に注目し、両作品における意味と関係について検討した。それによって、作家以前の漱石をマークする両作品における創作意識が、いかにつながっているのか、それ以後の作品といかに関わるのかを考察した。

従来の研究では、この二つの出発点の意味と関係について検討されることはなかった。しかし、両作品における鏡の表象を関連して検討することで、前近代から近代へ、東洋から西洋へ、象徴から写真へと変容が、明瞭に浮かび上がってくるのだ。『木屑録』では、前近代の「風流」人という規準が「顔」を分類する「鏡」となっており、『倫敦消息』では、近代的な「国元」が「顔」を分類する「鏡」となっている。両作品の根底にある顔と鏡の表象は、連続しており、深化されているのである。このように、漱石文学における鏡の表象を考える際に、『木屑録』と『倫敦消息』は重要な出発点となるであろう。

## 第二章 鏡と時間

#### ——夏目漱石『薙露行』論

第二章では、『薙露行』における漱石の独創した部分について検討した。特に、原典と異なる「鏡」の章に焦点を当てている。鏡世界を描く際に時間に関する言葉が頻出するため、本章では、鏡と時間について考察した。そして、『薙露行』の前年に完成された『文学論』などを参照しながら、鏡世界のシャロットの女と、現実世界のエレインが生きている時間の特質と関連性について分析した。

その考察によって、『薙露行』においては、鏡世界にある循環する時間と、現実世界に

ある循環しない時間が存在していることが明らかにになった。つまり、シヤロツトの女は、循環する時間が壊されることによって殺されたとすれば、エレーンは、循環しない時間で命を絶った時、循環する時間によって救済されることになるのだ。このように、『薙露行』は、先行研究の論じた後年の姦通を扱った作品のみならず、鏡と時間の問題を扱った小説も予告する作品だと言えよう。

### 第三章 「薙露」から『薙露行』へ

——夏目漱石における詩と散文

第三章では、英文学を取材しつつも、漢文学から題名をとった『薙露行』についてさらに検討した。先行研究では、『薙露行』はどのような材料で書かれたかについて綿密に研究されてきた。一方、なぜやや奇異で「謎めいた」題名になったのかは明らかになっていない。

そこで本章では、従来議論されてきた「挽歌」説を踏まえ、楽府詩「薙露」の意味と作品の内容の関係を明らかにした。また、同時代文学との比較を通して、同じ「詩興」を散文で表現した漱石の『薙露行』の特異性を考察した。漱石における詩と散文のジャンルの融合を最も明確に示したのが、『薙露行』の「謎めいた」題名なのだ。このように、『薙露行』において、漱石は西洋文学あるいは視覚芸術を題材としたのみならず、漢詩と英詩との接点を求め、詩に凝縮された詩興を散文のなかに融合し、「詩の如き小説」という独自の文体を確立したのであろう。

### 第四章 『草枕』の「ユートピア」と一人称

——鏡としての語り手について

第四章では、西洋画の画工でありつつも、東洋的な旅に行く一人称の語り手について検討した。従来の研究では、『草枕』に関する作家論と作品のイメージ論が数多くあった。しかし、文体に関する研究は、ほとんどない。なかでも、一人称の変化を考察する研究はなかった。本章では、自称画工という設定と一人称の変化を考察し、「余」によって語られた「ユートピア」（世界）の特異性を究明した。

『草枕』において、一人称単数が一人称複数に変化したにすぎない、個人としての意識は、一般的な画工の意識に変化していく。そして、一人称の変化によって「ユートピア」（世界）の区別の仕方も、変化していくのだ。『草枕』の「ユートピア」は、先行研究で指摘されてきた現実逃避の美的理想郷でも、世紀末的悪夢の場所でもなく、一人称の制限と変化によって変わりつつある、夢と現実との間で揺れている世界なのである。矛盾した両面を併せ持つ語り手によって語られた「ユートピア」は、一方の夢を読者に伝えながらも、他方の現実も暗示していると言える。このように、鏡のような一人称語り手のダイナミックな映し方にこそ、『草枕』の魅力があるのだろう。

## 第五章 『夢十夜』『第八夜』における鏡と夢

——『鏡の国のアリス』との比較を通して

第五章では、『夢十夜』の「第八夜」を、『鏡の国のアリス』と比較しながら検討した。先行研究では、「第八夜」について「夢の持味」や「生存の感覚」などと抽象的に論じられてきた。しかし、「第八夜」において、鏡のモチーフが具体的にどのような機能しているか、また『鏡の国のアリス』との比較を通して、「第八夜」における鏡と夢のモチーフがどのように関連しているのか、これらの問いに関する考察はまだない。

そこで本章では、「第八夜」に描かれた夢と現実の両方を映す鏡について検討した。

『鏡の国のアリス』では、夢（「偽もの」）に対する現実（「本もの」）の優位性が示されている。それに対し、「第八夜」では、「鏡」を見る「自分」にとつて、覚醒であつても断絶する対象しか見られない。鏡像が反復しても偽になつており、持続しても意味がない。現実はずしも夢より優位にあるわけではないのだ。また、『鏡の国のアリス』では、二つの状態が比較的明瞭に書き分けられている。一方、「第八夜」には「こんな夢を見た」という始まりがなく、「夢」と「目覚め」の境界が曖昧になつており、夢と現実が交差しているのだ。このように、『鏡の国のアリス』のように現実の立場から夢を回想するのではなく、「第八夜」では、夢と現実の矛盾した感覚が共存していると言える。このように、「第八夜」の鏡の空間においては、真と偽、意味と無意味を判断する基準が曖昧になつているため、現実と夢が交錯しているのである。

## 第六章 『門』における宗助の言語活動

——参禅の意味を問いなおす

第六章では、『門』に描かれた言語と鏡について検討した。具体的には、正宗白鳥の批判に基づく従来の観点ではなく、正宗白鳥も評価した宗助の言語活動に関する物語という観点から、参禅の意味を考察した。参禅前の宗助にとつては、手紙や刊行物などの文字言語が、他者と関わる主要手段であつた。それによつて、宗助は、直接的な対話を回避してきた。しかし、参禅後の宗助は「鳴きはじめ」た鶯の声に自分自身の声を重ね、それまで回避してきた問題を直接的な面談によつて、解決方法を試みるようになった。このように、参禅を転換点として、宗助は、文字言語による間接的な対他関係、すなわち「独り言」のような文字言語で閉じられた関係から自由になり、音声言語によつて直接的な関係性を築き上げるようになったと言えよう。

つまり、宗助は、これまでの他者と関わる手段である文字言語を一度放棄することによつて、自己の起源に目を向け、言語活動を再生する契機を獲得したと考えられる。宗助にとつて、参禅は、このような言語の死と再生、消滅と増殖の働きを果たしたのだ。従つて、参禅とは、宗助が「何もしない」鏡になろうと「する」ことではなからうか。

## 第二部 うつされる文学

第二部では、中国における漱石文学の翻訳と受容を考察することで、漱石文学が当時の中国文壇によっていかにかにつされたかについて検討した。第七、八章では、漱石文学が最初に中国にうつされた際にいかなる背景があったか、そして具体的にいかにかに翻訳されたかについて考察した。第九、十章では、漱石文学と、最初に漱石文学を受容した魯迅文学を比較した。なぜならば、同じく「国民作家」と見なされた二人は、ともに外国文学を深く理解した上で、自国文学の文体と表現の標準を創立したからなのだ。つまり、二人の「国民作家」はともに、外国文学という他者（鏡）を通して、はじめて自国文学の独自性を獲得したと言えるよう。このように、中国における漱石文学最初期の受容状況ばかりでなく、魯迅によってうつされた漱石文学の魅力も探っていく。

### 第七章 夏目漱石文学最初の中国語訳について（二）

#### ——魯迅訳「懸物」の成立を中心に

第七章では、漱石文学最初の中国語訳である魯迅訳「懸物」の成立背景と意義について検討した。漱石文学が中国に移入された際に、最初は長編小説ではなく、「懸物」のような小品文学であった。先行研究では、この短い小品が軽視されたため、その訳文について考察されることはなかった。しかし、本来、詩と散文の価値を判断する基準が異なるため、短い詩的な小品の価値は、必ずしも長編小説より低いとは言えないだろう。しかも、一九二三年前後、中国前近代の長編小説から新たな小品文学へ転換される文学状況のなかで、漱石の「懸物」が翻訳されたことは、無視できない重要性を持っていると考えられる。

本章では、まず類似した題材を扱った小説『門』の一部と比較することで、小品としての「懸物」の特徴を明らかにした。また、一九二三年前後の中国文壇で新たに出現した小品との関わりから「懸物」の翻訳背景を考察した。さらに、「一夜」などの翻訳候補作との比較を通して、「懸物」が最終的に選ばれた理由を検討した。このように、中国において最初に『永日小品』が翻訳されたのは、単なる偶然ではない。なぜならば、ちょうど「懸物」が翻訳された一九二三年前後に、小品文学とそれに関する理論が、中国に盛んに移入されていた時期だったからである。つまり、漱石文学最初の中国語訳は、中国文壇によって小品文学としての価値が見いだされ、同時代における中国文学革新派の小品文に対する要請に応えるためのものであったと言えるであろう。

### 第八章 夏目漱石文学最初の中国語訳について（二）

#### ——魯迅訳「懸物」の本文を中心に

第八章では、「懸物」最初の中国語訳である魯迅訳の本文を分析し、その特徴を考察した。具体的には、魯迅訳と、民国時代の尤炳圻による中国語訳および一九八〇年代の李明非訳と比較しつつ、「懸物」が最初にいかにかに翻訳されたのかを検討した。それによって、

魯迅訳「懸物」の特徴ばかりでなく、漱石文学が中国で最初にどのように翻訳されたのかも究明した。全体としては、なるべく原文の口調を保つように訳し、漱石の表現を意識的に移入するという魯訳の特徴が判明した。これは、従来の「随意翻訳」の弊を改め、翻訳の精確さを図る翻訳者の姿勢によるものだと言えるだろう。

しかし、これほど直訳に拘った魯訳には、改訳も存在している。たとえば懸物という文化現象に関する魯訳の表現には、懸物を眺める回数を増やす細部の改訳が見られる。この改訳は、懸物という日中共通の文化現象に対する両国の認識の相違によるものだと考えられる。さらに言えば、これは、数字の変更というよりも、むしろ数字に象徴された感情の重さに対する補強なのではなからうか。このような改訳から、漱石小品は、中国語にうつされた際に、作品の内容よりも、表現方法と作品全体の情緒のほうに優先されていることが明らかになったのである。

## 第九章 夏目漱石『夢十夜』と魯迅『野草』における不安の表現方法

### ——「第七夜」と「死後」を中心に——

第九章では、「第七夜」（『夢十夜』）と「死後」（『野草』）の夢における不安の表現方法について検討した。その際に、両者を媒介する厨川白村の文学論との関連についても考察した。さらに、厨川白村や漱石の文学論を参照しつつ、両作品における不安の表現方法を具体的に分析した。

「第七夜」と「死後」は、場所に対する不安を描く際に、纏まった感情になる前の感覚で「自分」の複雑な気分が表現されている。また、他者に対する不安を描く際に、ともに沈黙または簡単な会話をを用いている。これらは、象徴主義文学の表現方法、特にメートルリンクの「静劇」<sup>メタリック・ドラマ</sup>につながる方法だと言える。従って、『夢十夜』は、象徴派の表現方法が活用された作品として、『野草』のなかで受容された可能性が考えられるのだ。

一方、不安の味から見れば、両作品の死後感が異なっている。「第七夜」の不安は、次第に強まっていき、結末では絶望の頂点に達している。それに対し、「死後」の不安は、次第に薄らいでいき、結末では希望を残している。前者はどちらの可能性も失った絶望に対し、後者はどちらの可能性も維持する希望で物語が終わるのだ。この相違は、「無限の憧憬」に近づく漱石の詩的な小品と、動乱の社会に役立てようとする魯迅の文学の違いによるものだと言えるのであろう。

## 第十章 『幻影の盾』と『鑄劍』における東西古典を書き直す表現方法

### ——夏目漱石と魯迅における自国文学と外国文学——

第十章では、『幻影の盾』と『鑄劍』との表現方法を比較し、両作品の類似点と相違点について考察した。両作品の類似点から、『幻影の盾』が『鑄劍』において受容された可能性を検討した。そして、両作品の相違点から、同じく外国文学を受容する際に漱石と魯迅の態度の違いを究明した。

両作品の類似点として、「騎士」と「武士」が同時に登場した物語背景の設定、歌と鏡という表現と内容の連動性が挙げられる。まず「騎士」と「武士」の揺らぎによって、西欧の中世世界と東洋の世界が融合され、または、東洋の古典世界に西欧の影が見え隠れする神秘的な空間が生まれるようになっていっているのだ。また、対称性を持つ歌と鏡は、両作品のクライマックスにおいて、同じ場面で響き合いながら、物語の空間の神秘さを強化しているのである。

一方、両作品の相違点として、『幻影の盾』の結末にある純一無雑の世界と、『鑄劍』の混沌一体の世界との違いが挙げられる。この表現上の相違点は、漱石と魯迅の外国文学に対する考え方の相違点と重なっている。つまり、両作品において、題材と表現のどちらを自国文学にするかという点で正反対になっているように、二人の作家の外国文学の受容と自国文学の確立に対する考え方も異なっているのだ。魯迅は自国文学に外国文学を見出し、自国文学に活力をもたらす栄養として外国文学の役割を強調している。それに対し、漱石は外国文学の受容を通して、自国文学の独立をあらためて自覚しているであろう。

## 終章

このように、第一部では、漱石文学における鏡の表象について考察した。鏡の表象は、漱石文学の出発点においてすでに重要なモチーフとして登場している。後の作品では、ときには象徴性に富んだ鏡として作品の時間を変形させ、ときには「意識」の鏡に擬える一人称として語られた世界に「幻惑」を創り出し、ときには夢と現実の境界を曖昧にし、ときには登場人物の自意識と言語と連動するというような多様な機能を担っている。全体的には、前近代的な象徴性に富んだ鏡から近代的自意識を表す鏡へと変容する傾向が認められる。しかし、後者に変容したといっても、前者の影もしばしば見え隠れしているのである。

また、漱石文学が海外にうつされた時に、別の変貌を遂げた。第二部では、主に中国における最初の翻訳者である魯迅の訳文と創作に映された漱石文学について検討した。それによって、中国における漱石文学最初期の受容状況ばかりでなく、当時の中国文壇に映された漱石小品の魅力も浮き彫りになった。つまり、漱石小品のなかでは、東西文学が内容として共存しているのみならず、刹那で永久を示し、瞬間で人生を示す俳句的な表現方法と、微細な感覚で気分を表し、有限で無限を表す象徴派に近い表現方法も共存しているのだ。ここにも、漱石文学における東西文学の接点が見いだされるのだろう。

本論文で考察されたように、前近代と近代、東洋と西洋、象徴と写実、自国文学と外国文学など、一見異なる水準にある問題は、実はともに鏡の表象につながっている。鏡の表象を通して、漱石文学を新たに見直すことができるだろう。

今後の課題として、次の二つが挙げられる。第一に、漱石の後期作品における鏡の表象を検討することである。第二に、漱石文学の各時代の中国語訳を検討することである。このような観点から、漱石文学を今後さらに考察していきたい。